

今日の最初のお話を始めたいと思います。

日本は毎年のように大きな災害に見舞われてきました。そして、大きな災害が起こりますとそこには必ず報道関係者が駆けつけます。その中に海外のメディアの姿があることも決して珍しいことではありません。

そんな中、海外のメディアが撮影した被災地の映像がちよっとした話題になっているということに耳にしました。ネットで探してみましたら、イギリスの放送局が制作した映像にたどり着くことができました。その映像を見たとき、私は、日本のメディアの報道とは何か違うなという印象を持ちました。まるで上質なドキュメンタリーを見ているように感じたのであります。では、どのような映像なのでありましようか。

最初の映像は、地震の翌日に撮影されたものであります。まず、カメラが映し出したのは、路上に散乱する家財などでありました。カメラはそこから少しずつ視野を広げていきます。そして、リポーターの姿を捉えますが、その後ろには何かが波打っている様子がうつすらと映っています。カメラがピントをそこに合わせていくと、路面が割れて通行できなくなっている道路の姿がはっきりと映し出されます。

もう一つの映像は、さらにその翌日に撮影されたものであります。まず、一面の焼け跡が捉えられます。リポーターによって、そこが多くの人でにぎわっていた市場であつたことが知られます。カメラはゆっくりと移動しながら、

その全景を映し出していきます。天候のせいでありましようか、それはかすみがかつたような情景でありました。その中で廃墟のようにたたずむコンクリートの建物が印象的でありました。

これらの映像に対しまして、日本におきましても高く評価する声が上がっています。例えば、この海外メディアの映像のほうが被災地の状況がよく分かるというようなものであります。

しかし、ここで留意しなければならぬ点もあるように思います。それは、これらの映像が遠く離れた海外に住む人たちに向けて作られているということであります。そのため、被害に遭った地域にはどのような歴史があるかということでありますとか、日本の家屋がどういう構造をしていて、なぜ大きな被害が出てしまったのかというようなことを伝えていく必要があります。そういうことのために取られた手法が、日本人々にも分かりやすさとして受け入れられたのではないかと思います。

これらの映像は、災害が発生してから日を置かずにアップされています。一方、その頃の日本のメディアには、刻々と変化する状況を的確に伝えていくことが求められていたと思います。ただ、それだけでは伝えられないものもあるのではないかということは、今回の例から学ぶ必要があるようにも思います。

次は、水と油ということについてお話ししたいと思います。

水と油は混ざり合わないものの代表のように

言われています。なぜ混ざり合わないかということについては、それぞれの分子の性質の違いなどで説明されることが多いように思います。しかし、全く混ざり合わないわけではありません。今日は、身近な食品などを例に取りまして、水と油を混ぜる方法について探ってみました。

まず、サラダなどにかけるドレッシングを取り上げたいと思います。ドレッシングの多くは、酢と油に調味料を混ぜて作られています。酢はそのほとんどが水分だということでありますから、まさに水と油であります。これらの材料を容器に入れただけですと、水と油は混ざり合うことはありません。このままサラダにかけましても、恐らくおいしくないだろうと思います。しかし、これをかき混ぜますと、混ざり合った状態にすることができまます。これならおいしくいただけるだろうと思います。

しかしながら、一生懸命かき混ぜましても、しばらくすると元の分離した状態に戻ってしまいます。

では、マヨネーズはどうでしょうか。同じような材料で作られているにもかかわらず、マヨネーズは通常、分離することはありません。その秘密はどこにあるのでしょうか。それは、卵を加えていることにあります。卵に含まれる成分によりまして、水と油が混ざり合った状態を保つことができるということです。ちなみに、水と油のように本来混ざり合わないもの同士が混ざり合って、均一な状態になつ

ていることを乳化といいます。最初に例に挙げたドレッシングにおきましては、かき混ぜることによりまして、一時的に乳化の状態を作り出しているということになります。

この乳化の状態を安定的に保つために使われるものを乳化剤と呼びます。マヨネーズにおける卵は、この乳化剤としての役割を果たしているということでもあります。

もう一つ、水と油が混ざり合っているものの例として化粧品を挙げたいと思います。化粧品の中にも水と油の成分が含まれているものが多いです。

水を使う理由としましては、化粧品を肌に浸透しやすくすることでありますとか肌に潤いを与えるためというようなことが言われています。また、必要な成分を溶かし込むためにも使われているということでもあります。

一方、油につきましては、肌に薄いベールを作るによりまして、皮膚からの水分の蒸発を抑える役割を果たしているということでもあります。それによりまして、肌の潤いを保ったり皮膚を柔らかく保ったりすることができるということでもあります。

これらのほかにも、水と油が使われているものがたくさんあると思います。皆さんも、身近なものの中から探してみたいかがでしょうか。

最後は、鉄道に関するお話であります。

鉄道をよく利用されている方でも、この電車は何年ぐらい走っているのかなどということに関心を向ける方は少ないだろうと思います。

ちよつと調べてみますと、日本を走っている電車は大体三十年くらい使われているようであります。そこにはかなり幅がありまして、中には半世紀以上も使われているという例もあります。では、使われなくなった車両はどうなるのかということでもあります。もちろんそのまま解体されるものもあります。しかし、多くの車両は整備さえできればまだまだ使えるということでもあります。そのような車両がほかの鉄道会社で走り続けているという例がかなりあるということも分かりました。

一方、海外に渡って走り続けているというケースもあります。これから紹介するインドネシアはその例であります。

インドネシアが日本で走っていた車両を受け入れるようになったのは二〇〇〇年以降であります。その頃、インドネシアにおきましては、都市部における通勤需要が急速に増大していました。これに対応するためには多くの車両を導入する必要があります。一方、日本の側におきましては、新しい車両の導入に伴って、それまで使っていた車両をどう処分するかということが大きな課題となっていました。

実は、インドネシアでは、これ以前からインドネシア向けに日本で造られた電車が走っていました。そして、その電車に対する評価は極めて高いものがありました。

インドネシアが日本で走っていたいわば中古の車両を受け入れるようになった背景には、このような両者の関係もあったのではないかと思

います。

カラフルな色彩をまとうて走り出したこれらの車両でありますけれども、決して順調なスタートではありませんでした。日本との気候の違いでありますとか、車両のメンテナンスに対する体制の違いなどから、様々なトラブルに見舞われたのであります。

トラブルの発生を受けて、直ちに日本から技術者が派遣されることになりました。派遣された人たちは、まずはトラブルの解消に全力を注ぎます。しかし、それだけではありませんでした。

現地の人たちを巻き込んで、メンテナンスの体制でありますとか、車両のシステムなどについて議論を重ねました。そして、両者の長所を取り入れながら、少しずつ現場の体制を改めていったのであります。

このような取組を続けていく中で、両者の信頼関係はどんどん深まっていきました。

その後、インドネシアは、中古車両の導入から自分の国で車両を製造していく方向へとかじを切ります。最近、その電車が完成しました。その形は日本の電車とそっくりでありました。これを見て、両者の信頼関係は変わらずに続いていくだろうなということを思いました。(了)